玉乃井
景清
うとふ
安達原
ちくふしま

九

玉井

ワキサシ
夫天地開闢のはじめより天神
七代地神四代よりほゝでみ
のみことゝ申は我事世挊をしてのうへ
ほのすそりのみことの釣針をかり
うめなすゝ海邊にて釣をたれしに
ば釣針を魚にとられぬ此由を兄尊

ヨチ

みやしを志ばしとて針をなをなと
宣間けんをくづし針につくりて
参らすれどももとの針をせめたまへば
ざらば海中よ入りば釣針を尋ねん
と思ひ立ちくはせんもつゝまうことも
志らぬしほつちの翁のをしへよ
たゞひそまるかゝる[illegible]けしき

上歌「もろかる道を行くうちに浪路も
おりかへたく来てまつさうる
打綿海の都と志るは水もなく
ひろきさ[illegible]よ見えにけりけり
ワキ詞「扨も志ほつちの翁のをしへ
志るひざうの都に入ぬなるよ
ありの[illegible]をさしまゐらせ[illegible]あり

門前よ出れ升が此井乃ゆう程れぎん
ちさうやきいよの常あらひだよいつ
乃くつらの末ありぶ木の下よ立よわ
老もうなし事のよしもとうかく
いやと思ふく　一セイ廿二人　そうあつきだよりひ
ぞの門の明暮乃いあつき月日乃光
一二行　巴　下　一元
アまうあ　いとまもをし一手も汚

一二人　一二行　一二行
尽よ緒つをしきようさい水あら世を
レテサレ　みちうあさの水のいつとを若きあ
よりひもて泊ちくさる薬の水のゆへあ
わや若きぬ門よ出入や月日思もとぬ
久かよあめよもまもや此国の行
末をさ住居うれくりかへれおの
上云　下云　ウヤ
つくれかうきあい世　ウ　あうきい命と泊く

あらじ心の底もくもりなき翫月れ
桂のかげりて枝をつらねてもろ共に
みだれ夕かげる玉の井の水に影うつり
だのもしや　和　玉井の里は
なるくも世を海にて渡きかきせ桂
二人まりむのつるべを持水をくみを
氣色みしうり言葉をかきえもいうなお

きれば是成桂の木陰に立よりくれをと
隠つたるをそろ　シテ世付　人ありとたな
みつる露の玉のつるべをしつめしこむ
玉井に立より底をみすれば桂の木陰に
人みしうり是いかなる人やらん　和せん
君恋を顕きてあさ顔に咲ぬなり
なすらさめてなすらり浮姿ぞいり成人

みそしまいのり　シテ「荒ふしやうとう
姿乃みめしきうるはしくも我おもふこゝろ
雅のはい気色かはらぬもみよさやひやう
あり明人ありいのきそてまつる御名を
名乗給ひまゐらせ　同「今ハ何をかつゝまん
さて我ハ天孫地神四代ほゝでみの
とも我なりと申せ　地「荒ふしきや扨ハあれなる

みのみことにてわたらせ給ふ事のありがたさよ
あらありがたや　シテ「扨ハいかなる子細にて
是迄旅乃みちかくれなくてかなしみ給ふ事
泊れる人の有ぞも何ゆへぞや
地「兄御尊の理ハ我釣をうしなひ魚をと
らんとて是迄来り寄の御家をてらせ行
くとしや渡らぬ舟の行ゑ知れぬかなし

シテ詞「さらしめさぬは海神は龍宮わだつみの宮

ワキ詞「さてこの姉妹と見えつる二人の御かたは

シテ「豊玉姫　我はまことの玉依姫

上「たちよりきんしうの裳してつきまし

あふら御簾の影やびやうぶよりや打

ときてゆうしてのかざよりおもひく

下「大ぬけれひくてあまたの心わく

シテ詞「めづらしやかうらつき成けるなれ

我やうてかうろよあひせちよう候は

釣をも尋ねしれは心易く思召候へ

ワキ詞「うれしやさらば宮中へ参り候へ

名乗「うつくしきも天のみかどの御孫なる

つくの都よりさまよふあかかり

きくらば第の人　龍宮又かくしてひめ

きとのほりたりとのやてりかゝや
き雲れや〳〵かうこそしきさるもとまやう
し入ちり　かうしろうのうちいさ
かしつき給章の意趣を語り給ふ
我このうへの釣針をかりうしなひめまいらう
浪のうへのりまの魚とをわくまさ由を歎き
絵へと其針よあらはとことよ

かくよせうしをとりつめちまつくみだきを
きさ心のいらちんと語り給へいかそれ
かうき心あく思ひきはまつてうきことも
寿つき国ようへしやへへ　我この
うこのいりあらわ塩満ちひるれかさ
つの玉もとそるよむりおいちん心よ住きて
国も久うきのあめようかくまこ御神

の外祖とありて豊姫もたぐひあらぬ
海宮の月日をへまかく三年を送り
故へ里 かへりて三年に成ぬまゝ我
国よりくりのあるべし海路のしるべ
めさるべん 内侍やもとく思召さげけ
つきの宮主ともあひて海中の宮あ
さめくあり 大臣ふかきしわや

てとらせ陸地より送りまゐらせん
其頼ハまことに任りませ 尊ハちる
塩ミつ玉のそよりうるぬは影あつて
なり けのくむせをとりまいらせく豊
姫玉より二人の姫官金銀をもんでとよ
玉ちどうあへざるまちかきとりは釣を
侍従とやわらつるいるやを持し手さきよ

シテ「まうと乃君のめいに随ひびわうつこの
宮ゐてうつさんと寄て天降のみきまよ
だくまつる 上 堀満しほひもあそつれ
玉ざくしぞうさんよるへちぎや
舞楽をそうし世姫よう袖をかえ
して舞給ふ 上 何きも妙なる舞の
袖ツくずめのうんはしかつろのまゆ

もえん月も照りそふ花の姿ゆきをとめ
ぐらひだをとうおもかげ
まわらわいに 上 わらつゞみころや
まわりけの乃てんやめし姿は舞う
雲よう九雲に蟷アどかを枝よすより
だ女よ汐もを彼もさなやうよあし
ならうしくと拍子をそろへて附うつ
まいぞる御代をぞ立給ひぶうつり給へれ

波よりあがりさる三の宝をもせとたらく
まつらんど出立のやうに宝をもち二人
の姫は玉をさゝげつゝ龍王たちとゝろ
浪をわけてしほをさきてなかつよ
送りつきたり宮に送り奉りをさめてまつ
さて又龍宮へ帰りけれ

景清

次第
消ぬたよりも風なれハ露の
身いかになりぬらん 是ハ鎌倉亀
が江が谷に人丸とや女にてはべりける
我父悪七兵衛景清ハ平家の味方
たるにより源氏ににくまれ日向の国
宮崎とかやに流され年月を

送り行にあるゞいまハあらぬ道まとろ
おぼさるゝも旅乃ならひまゝ父の
とこう縁つよく思ひね乃涙かたしく
草のまくら露をうつくいとゞしき
旅られ、相模の国を出ちく遠
よりく急をさをいまよ遠き江よ旅
舟乃三河よ渡をハ橋乃雲井の都

いつ掛ぅね乃身よ馴てなく
やうくれ是ほとよ見くや日向国
宮崎とかやよ着ぬらく父ぞ乃
御行衛を浙尋あらねもらふてい
シテ上 松門獨とちて年月を送りかつ
かうだ清光を見ざれバ時のうつるをも
わきまへも暗くたる庵室よ徒よ眠り

ころも寒暖にあたへざればはだへは
こつと衰へたり 上歌 地 とても世を背くとならば
墨にこそやつるべきにそのおさ
まゝや俗の果たるか様に我よ
うとき身を誰か憐みて
のうさを訪ぬよしもなし
きやおも身なする草の庵住居

袖もつてはらふよ拝めつるかよゆゆ
ばかし乞食のあつかひとせず端も苦しみ
衰えたるうや シテ詞 秋きぬとめにはさやか
よみねかぜの音信いつるをきこぬ
迷ひのうれさをぞきゝやまた宮も
あり シテ詞 其三家ハ不為あり 一夜の主
ぢとなりてたくさんよいげとらさ

一ヽヽなへき　トモ詞「いかにこのわらやの内へ物
とはう　シテ詞「そもいかなる者ぞ　トモ「おろされ
人のゆくへや知てある　シテ「流され人よ名
てもがな字をハなにと申候　トモ「平
家の侍悪七兵衛景清と申候
シテ「さやうの人をハ兼てハきゝて候へとも
盲目なれハみる事なしばもあさまし

きゝゆう様うきうぐるよあはれをと
侭はありど妻まいらすをとハバよそにて御
尋ね候へ　トモ詞「扨ハ此あたりにハなく候ハ御座
さよハぶ奥へ御出ありて尋申され
候へ　シテ詞「ふしぎやな今の者をいか成
者ぞとおもへば此盲目なる者の
子にてありけるぞや我一年尾張の国あつた

みるく遊女と契り一人の子をまうく
女子なれハ何の用にたつべきと思ひ
鎌倉亀がゑがやつの長に預を置し
がなれぬ親子とかやし父に向つて言
葉をかはし 上音 声をはやして面かけを忍
ぬ盲目ながらかきおぼえてら心払
なかく親のきづなれ トモ向 いかに此

あさましやと人の濃りなり ワキ向「里人なれハ
何の用にて候ぞ トモ「あるまじき人の行
衛や御存ハ ワキ「流されたる人のあたりても
めず様なる人をは尋候 トモ「平家の
侍悪七兵衛景清を尋申ハ ワキ「唯今
此方へ出でし山陰よりかやの内なる人ハ
いかさまけりきるか トモ「其さまやうハ盲目

あるは乞食非人ひつき　ワキ あらせうし盲目なる
乞食とならばあるは景清なんとおもふて
きやう景清のるすを申てんへはあまりよまま
さまなはことの御愁傷のきしき
みしらでは何と申たる事にて
けるぞ　トモ 御不審をもあつては何ともつゝみ
ましく申景清の息女にてわたり候

ども一度ちくごによば対面ありたき由仰ら
れはひとく景清と申くは下向ありては
げの事によるべきやうにもおはせひ
て景清によひき合せ申されて給り候へ
ワキ 言語道断扨は景清の御息女にて
渡り候かまつ心をしづめてきこしめされ候へ
景清は両眼しいてましくてざんかう

おさに蟄居をおほせつけし日向の勾当と名
をつき給ひのらをとえ捨人をたれに
我らごときの者の情をもつくす
命をはつさんが爲よりくへる御物様
を恥かはしきてば名乗あさと推量
よてば某父は侍や景清と呼人
しば我名おらいてもすへし其何は對面

あつらく昔人うのはお語へこ所こ濃へ
おつく景清のわすりはば悪七兵衛景
清のわすりはりも　シテ同　うしまりくはかれき
たよ故郷の者とて尋しを返しぎ
あれはうすそともらでおのつて海を出し
下　さ千行の悲涙たもとをくたし　詞　萬
すへはみな夢のうちれあすしこなうと

うらはめしくども此世はあさきゑんと思ひ
切たる乞食を悪七兵衛景清とあらん
とよびてこなたへきたらず其上
我らは此国の　日向とう日よもしよ
がく向ひたるゝもよひ給ひてか
あく捨し梓弓もはや世へるものゝ
名のり悪名をとれと思へとも又腹

ふらや言はすゝあかうくだから
あるかたくはぶくまれやあらは偏
よめうるの杖をつゞまに似合るへし
がへあるみめくをとりて腹あしき
よしなきらひを吐ゆるしわしき世
目きれとくも人乃わもへ
く一言乃うちにあるおもと山をわけ風

さぞハ雲よかんぬ花のゆかしき尊れけし
はよ備まる浦なる袖よよする
浪もきこゆるハ夕塩もはるとや澄んざい
まうよまれも平家なり物語りし
めくはあく漢をとやさきや　シテ「めつよ
やはりや今せて心よかゝるれはなく
緩画をとりて御覧あるをもぬるては

ワキ「いやいやこれをのみそては語よくらし
かくては又我らより前に景清をと尋
ねたる人はなく候　シテ「いやいや御身
より外に尋ねたる人はなく候　ワキ「あら
偽りを仰やまさしう景清は息
女と仰られ候ひて御尋ね候ひしあると行と
てはつらかんなうちの病りさへはあるまゝ

まゝくは供養してんぶ息つゝく父でよ御
対面ひへ「おなつかしやかくまで
来りてそゞろめしやちかく此道をと
かつ雨風露霜をしのぎて来りたる心
ばしも徒よあはれうめしや母お親
にも慈悲も子ぬよりきゝうかや情あや
「今日迄ハつこそかくすと思ひしよあはれ

きうつゆかりなの直前おやちつし
や御身ハ我の姿おく親子とも名字
給よおりハごとよ我名をもあかるへし
と思ひきりつゝすごもわが我せと恨ミと
男よおよ　気きまいおしへハぶきし人
ともこへうしとそてうこそし海其郭
ひよい正しき子なえたみもとれしとおよ

上哥 いかなしけるよ一門若殿のうちうく
よかうをおもへひきもとゞみて所をく
まを毎月の景清は朔よりも出庭
舟よりすてゝかおつまし其以下
我思景清くは捨てまきれしかと敢
揖取舟よのとき後隔おかりしはちも
うらやましたるの騏驎も老

ぬきハ駑馬にもおとりてかくなるも
ワキ詞 あら痛はしや去ながら渡りくべし。いかに景
清に申すべき御娘子の御所望の候
シテ詞 何事にて候ぞ ワキ 八島にて景清の
昔高名のやうをうけたまはりたき由に候はゞ
ぐと御物語りてきかせさせ給へ
シテ 「景清ハおもひよらぬ似合ぬ所望なれとも

久しこれ迄きたる人参りたる心は
しはしみひんよ猶よ語くゆき候
へ此物語を申さば者どもやうて古郷
急ぎ帰して給り候へ心ならず浮世の
かくりそひはでやうて海しやうする
みらくはいてさても寿永三年三
月下旬の事なれば平家ハ船源氏

ハ陸両陣を海岸よつくて互よ勝負
を決せんとほつきも能登守教経の
たまふやうは去年播磨の室山備
中の水島ひよどり越よいたる迄一度
も味方の理あらずひとへに義
経かはかりことのいみしきよつてなり
いかにもして九郎をとらんと

さうあら庵ほしきれと宣へハ景清心
に思ふやう判官なればとて鬼神
にてもあらハこそ命をすてゝハ安かる
べしと思ひ教経に暇乞ひ陸にあ
がれハ源氏の兵あますましとてかけ
けるよ景清これをみて
物々しやと夕日影にうちものひら
めかいてきつてかゝれハこらへずして
ばつとひらく兵を四方へぱつとぞにげける
きたなしのけやとさまし座うた
かくて源平たかひにひかるめもせ
つゞ人をとめんハあへのうち物
ざわさいよかひてもむかしハ平家の
侍悪七兵衛景清となのりかけかきく

手どりにせんとてをふてゆくみほの
やかきたりける甲の志ころを取はつ
し取はつし二三度ぞよきのびたれども
思ふ敵なれハのかさじと長刀かいはさみ甲を
追とりえいやと引ほどに志ころハきれて
きて此方にとまれバ主ハさきへにげ
のびぬ遥に隔てゝ立かへりてさても汝
おそろしやうでのつよきといひけれバ
景清ハみほのやか頸の骨こそつよけれ
と咲て左右へのきにける昔わすれ
ぬ物語り衰へはてゝ心へ乱れける
はづかしや此世とてもいく程の
命のつらさ末近しはや立かへりなき
跡を弔ひ給へ盲目のくらき所の

ともしらぬあしき道橋と云の世へ
ばらへよとまるゆくぞとの只一聲を
聞のこす是ぞ親子のかたみなる

杜若

ワキ 是ハ諸國一見の僧にて候我此間ハ都に候ひて洛陽の名所旧跡残りなく一見仕りて候又是より東國行脚と志し候

詞 夕べ〳〵のかり枕
宿ハあまたにかはれどもおなじうきね
みのをはり三河の國に着にけり

ワキ詞
急ぎ候間程なく三河の国に着きて候又是
なる澤邊に杜若の今を盛りと見え
て候立寄り詠めばやと思ひ候 カヽル 實や光
陰とゞまらず春過ぎ夏もきて草木心
なしとは申せども時を忘れぬ花の色
かほよ花とやらんあらうつくしの
杜若やな
シテ女詞
なう〳〵御僧何しに

其沢ニハやすらひ給ひ候ぞ
ワキ詞
是ハ諸
國一見乃者にて候杜若の面白さに
詠め居て候扨此所をば何と申し候ぞ
女
是社三河の国八橋とて杜若の名所
にて候さすがに此杜若ハ名に負ふ花乃
上セル
名所なれバ色も一しほ濃紫
なべての花のゆかりと思ひなぞらへ給

ひとて取わき詠め給へかし其心なの
旅人や　ワキ詞　実々三河の国八橋の杜
若ハ古哥にも讀まれたるとなり何な
る人の言の葉や承度こそ候へ
女詞　いせ物語よいはく爰を八橋といひける
ハ水行河のくもてなれバ橋を八つわ
たせるなり其沢に杜若のいと面白く

咲乱たるをある人杜若といふ五文字
を句のかみに置て旅の心をよめと云
けれバ唐衣きつゝなれにしつましあれハ
詞　はる〳〵来ぬる旅をし思ふ
ワキ詞　在原の業平ハ此杜若をよみし哥也
あら面白や扨ハ此東のはてゝ此国迄
も業平ハ下り給ひけるか　女詞　こと

あつまき向ふ此八橋の家のつう
業平も心の奥深き前くのみち
ワキせん「国こ前八多きれは夜わきし
もかう
心の末かきて　女「思ひ渡りし八橋の
ワキ「三河の沢の杜若　女「はるばるきぬる旅
をしそ　ワキ「思ひの色を世にのこして
女「主は昔業平なれど　ワキ「筐の花

女「今こゝに　上哥同「在原のあとなへだてそ
杜若うつく沢への水のあさみどり契りし
人も八橋のくもでに物を思へとて
よそにても旅人に昔を語るきぬのくれ
やがて別ぬ名残かな
きぬきぬの　ワキ「何とかさそ　女「見苦敷
女問「いかに申上へ
候へどもわらはが庵にて一夜を明し給へ

ワキ「嬉しや頓て参らんし　女「あら〳〵く
此冠唐衣めされたる人　ワキ「ふしきやな
賤しき屋のうちより色もかゝやく
衣をきすきびたひの冠を着し是
みよと仰ごとハそも如何なる事にてそ
女「是ハ社此歌によまれたる唐衣高子の
后の御衣にて候へ又此冠ハ業平の豊
明の五節の舞の冠なれハ
形見の冠唐衣身にそへて持ちて候也
ワキ「冠からきぬハ先置ぬ扨々御身ハ如何
成人ぞ　女「誠ハ我ハ杜若の精也
植置し昔の宿の杜若とよみしも
女の杜若になりし謂の言葉なり又
業平ハ極楽の歌舞の菩薩の化現

あまたハ讀せず、わづかなる言の葉までも皆
法身説法の妙文なれバ草木迄も
露の恵乃仏果の縁となる故なり
ワキ「是ハ末世の奇特かな、正しき非情乃
草木よ詞をかハし法の声　シテ「佛果と
おもふや芭蕉乃音男の袖乃すまい
ワキ「是乃則ちよの義篤乃　シテ「修よ高室

ワキ「と芭蕉の本地箱ゑの教とむとく
シテ「普く済度　ワキ「利生れ　シテ「道ひろく
きぬるから衣、きつゝや袖をかへす
らん　シテ上「おきこし治のうらうへ唐衣
地「袖で都よりのさきもや　シテ上「柳桜お語る
がいかる人の行ゆまよつらく思ひ乃露
れ吉野山君かゝ角通ふ道芝の端も

あく終りもあり　若男が冠
志く奈良の京を見て宮によりし
してかりにかよひきり　仁明天皇の御宇
かさよいでもうしこき勅をうけそてだ
内山の春霞だつや法生の初めつき
春日の氏の家の勅位としてまさきりはひ
の冠をゆるされ　君乃恵のあうさは

故殿上ふそくの元服の時当時其例
挿ある故なりうかりけりと八申とうや
綏をも共世中の道　廣八宗へ　たひま
ぞもとろふる理りの誠ありきる者
ゆく筋を可もとむとそ東の方に
行雲のはきやたかりの海つらに立波
をもみそくづとさくるとみ方の末し

きよ浦山しくも帰る浪かなとうち
詠めけるハ信濃成浅間の嶽なれや
くゆる煙の夕気色扨こそ志なの成
浅間の嶽にたつけふりをちこち人の見
やハとかめぬとくちすさひ猶はるばるの
旅衣三河の国に着しかハ爰ぞ名に有
八橋の沢辺に匂ふ杜若花紫の

ゆかりなれハつましあるやと思ひぞ出る
都人然るに此物語其品おほきことなから
とりわき此八橋や三河の水の底ひなく
契し人々のかす〳〵に名をかへ
品をかへて人まつ女物やミ玉簾の
光も乱れてとぶ蛍の雲の上迄
ぬべくハ秋風吹と仮にあらはれ衆生済

唐の我らハ名やさや堂の人乃　面白き
まゆかぬ名月のさまり着き月やあらぬ
春や昔の春ならぬ我身ひとつハもとの
身にして本覚真如の身をわけ陰陽
の神といはれしも唯業平の事ぞかし
か様よ申物語疑ハせ給ふな旅人遥〻
きぬる唐衣きつゝや舞をかなづらん

花前に蝶まふふんくたるゆき　柳
上に鶯とぶへんくたる金　植置し
昔の宿のかきつばた　色ばかり社昔
なりけれ色ばかり社　昔男の
名をとめて花たちばなの匂ひうつる
あやめのかづらの　色はいづれ似たりや
似たりや杜若花あやめこずゑになくハ

蝉の唐衣の袖白妙の卯の花の
雪のよもしらしらとあくるしの
のめのあさむらさきの杜若の花も
悟りの心開けてすはや今こそ草木
國土すはや今こそ草木國土悉皆
成佛の御法をえてこそ歸りけれ

安達原

旅の衣は篠懸の露けき
袖やしほるらん
是ハ那智の
東光坊の阿闍梨祐慶とは我事也
それ捨身抖擻の行体は山伏修
行のたよりなり 熊野の順禮廻
國も皆釋門の習ひなり 知るよ

祐慶此間は心に立る願あつて西国
行脚に赴き候て　我本山を立
出てつくし路行末は紀の路かけ堀
岸のうらをたちまはり錦の濱は
折しも秋も末は松行も程なき日もか
さなれは程もなくかねて聞し陸
奥の安達原に着にけり

急候程に是ははや陸奥の安達原に
着て候あら笑止や日の暮て候此
あたりに人里もなく候あまりに
火の光の見え候程に立寄宿を
かりばやと存候　サシ女　実侘人のな
らひ程かなしき物はよもあらし
かゝる浮世に秋のきてあさけの

風ハ身にしめども胸を休むる事
もなく昨日も空しく暮ぬればま
どろむ夜半ぞ命なるあら定めなの
の生涯やな いかに此屋のうちへ
案内申候 シテ「そもいかなる人ぞ
ワキ「我等ハはじめて陸奥
の安達が原に行暮て宿をかるべき
便もあらじ秋のうらさびしさを悲て
一夜の宿をかし給へ シテ「人里遠き
此野辺の松風はげしく吹あれて
月影たまらぬ閨の内にハいかでか
留め申べき ワキ「よしや旅寝の草枕
今宵ばかりの仮寝せん只々
宿をかし給へ シテ「我だにうき此

菴よ　ワキ「さてとまらんと柴の戸を
シテ「ちりゐの思へハ痛はしさまゝ　上云同「さらハ
留まり給へとて扉をひらき立出る
ごと草もまじれるむしろうた
てやこよひしきなまし　しひても宿
をかり衣かたしく袖の露ふかさは草
の庵のせはしなき旅寝の床ぞもの
うき〳〵　ワキ「今宵の御宿ねんごろにも
ありかたう候へ又あれに見馴申
さぬ物ゝ見えて候ハ何と申たる物にて候そ
シテ「さん候是ハわくかせわとて中き
賤しき女のいとなむわさにて候　ワキ「いつ
面白やさらハよもすからいとなみては
みせ給へ　シテ「実愧しや旅人のみるめも

もちひいつとなき賤がわざ拙なかりけれ
と宵とも暁る此宿のあるじの情
深さよれ月もりくる閨のうちに
麻草の糸をとりをしく昔を
今にあさきぬや賤がうきよのよすがに
古くも世わたるうきつらきおもはれ
あさましや人界に生をうけながら

かゝる浮世に明暮し身を苦しむれ
しけよまことあれ人のいのちの葉や
まづ生をたもちてこそ仏法を
頼みたよりもあるまじかゝるうき世にあ
うまれて明暮隙なきさまなりたゞ心
さへ誠の道にかなひあへぬとて
も終になとか佛果の縁とならさらん

色
眼見て地水火風のかりにしはらく
もまとはりて生死に輪廻し五
道六道にめくる事唯一心の迷ひ
ありつる人の問のあはれあはれなる事を歎ける
よ人はちるよはさきやありし縁には老と
成和をこそ守あれき夢れよをなと
やいとはれる我ありなるらむ祓

恨みてもかひなかりけれ　抑
も五条あたりの夕顔の宿を尋
しこと　日影の糸の冠着し其
ろすきの人ならん　賀茂の祭のにあまき
よへかけりもしれ　いとけの車と祓
きち　や　急桜色もちりよ咲比ハ
かゝる人はほさの書の筆　ほまよかる

秋のいとすゝき　月はよるともや添
ぬる人　とめる賤がくる糸の　長
き命のつれなさを　なかき命の
つれなさも思ひあかしの浦ち鳥音
をのミ鳴あかす　いかに客
僧達に申候　あまりに
夜さむに候ほどに上の山にのぼり木

をとりてたき火をしてあたらせ
まゐらせん　暫御待候へ　ワキ　志
有難う候へ　はやく御帰候へ
てはやく御帰候へ　シテ　さらば頓て
帰候べし　やゝいかにわらはが帰らんまでの道
此閨のうちを御覧じ候な　ワキ　心得
申候　見申すまじく候　あら心易く

思召れ候へ シテ「あら嬉しやはやかまへて
御覧じ候な人数洪才乃究僧も忍びし
いかに ワキ「心得申候 ワキカヽル「ふしぎやあるじの
閨乃内をもの隙よりよくみれば膿血
忽融滌し臭穢は満て膨脹し
膚膩悉爛壊せり人の死骸は
数しらず軒とひとしくつみ置たり

めづらかや恐ろしや音に聞し安達原乃黒
塚にてもこもる鬼乃すみかあり
上哥「恐ろしやかゝる憂き目をみちのく
乃安達原の黒塚に鬼こもれりと
詠じけん歌乃心もかくやらんと
心もまどひ肝をけしゆく
べき方はしらねども足に任せてにげて行

てゆくく　めやよあさま成ぬ
僧とまれとさしもかくしゝ閨
のうちをあさまになされまいらせし
恨よ申よ来りたりむねをこがすほの
ほ感陽宮の煙ふん〳〵たり　野風
山風吹落ち　あるかみ稲妻天地
よみちて　空かきくもる雨のよの

鬼一口よくらはんとて　歩みよる足
音　ふりあぐる鉄杖のいきほひ
あたりを払つておそろしや　東方
よ降三世明王　南方よ軍荼利夜叉
明王　西方よ大威徳明王　北方
よ金剛夜叉明王　中央よ大日大
聖不動明王唵呼嚕呼嚕旋陀利

摩登根唵阿毘羅吽欠娑婆訶吽
多羅吒干鋡　見我身者発菩
提心聞我名者断悪修善聴我
説者得大智恵知我心者即身成
仏即身成仏と明王のけさくにかけて
かけて責かけをせめかけいのり
ふせにけり　今迄ハ

さしもげにいかりをなしつる鬼
女なるがたちまちによはりはてゝ
天地に身をつゞめまなこくるめきて
あしもとはよろよろとたゞよひ
めぐる安達が原の黒塚にかくれ
住しもあさまになりぬあさましや
はづかしの我姿やといふ声はすさまじく

物給しくづは拝ハあれどもさなく
き夜あしたの袖たちまぎれ
うきよまよりぬしあらたまり
失にけり

當麻

次第 教へうれしき法のはなひらくる
道に出でうよ 是ハ念仏の行者にて候
我此度三熊野に参り下向道に赴き
て候又是より大和路にかかり當麻
御寺に参らばやと思ひ候 猶もあ
くゆり紀の路乃関越してゆくや三

然れば黒田川浪もちるあり月影よ
はれ晝わかぬ心からして雲もかゝる嶺を
かゝる二上山の麓なる當麻の寺は
急よきりく　一念彌陀佛即滅
無量罪と見えたり　八萬諸聖教
皆是阿彌陀佛と説けりさればか　釋迦は
やり彌陀はみちびく一筋よこゝろゆる

もしも南無阿彌陀佛と唱ふれば佛も
我を念じ給ふなり　南無の稱名の聲
もなり　淨き道へ頼もしや濁りよ
そまぬ蓮の糸濁りよそまぬ蓮の糸
の五色にいろいろそなへたる　有難や諸
佛のちかひ様々あはれ普く超世の
悲願とぞ聞くひの中までも殘りなくつ

のそらハ晴やらぬ雨夜乃月の影をさへ
ざらぬ見れバゆく忍ぶや西へと計頼むらん
げにや願めハをさき道を行ことぞ
説まの世まよりに我らが為なれや
上哥 ときの法をきけバ法ハ是より一声のうちみさ
若しうへと頼ましハ実法萬年く
かる道ニ佛經の法いよもあらし多まく
此世ハ浄まハ又いかの世をまつのとれ
明きハ出る善き道法の場ニまします迄
ありはし法の場ニまします身にあり 此ほよ
是なる寺ニ寺へきやなれバ 何事
ぞうす 是ハ當麻の御寺なくハか
げんハた〻夜の御寺ぞかし又當麻なる
や作 まこ是ハ池ハきの乃いまを

まことに清き其故に浄土の井とも
中将や　あまは当麻寺　是は浄土寺
まの此世をば浄土との　名を残す所の
法の見仏にや法はありともそれともいさや
白糸の唯一筋に一心不乱になむあみだ仏
頼みの疑き人の心は極楽即是なるらん
一敷あれば梅又是成花桜常乃事よ

かゝりつゝ見るも故ある宝樹とみえたり
頼よくは法発しあられたりあまの弘を
此糸を染て　掛てほされし桜木の
花も心ある故に蓮の色に咲たいへり
中〳〵也ぎし春よりも夏来の国に成ぬ
のぢ色香よそめる花心なし　法の間ひ
程々へて濁りに染ぬ蓮の池の世を

シテ「もゝきそて清めし人ぞ業心の　迷ひを
ほとけハ　ひかりの　色々に掛し
蓮の糸を桜づく花の錦乃くそてぬきを
雲の上より晴曇る雪も緑も紅も
唯一声の誘ひにや西吹秋の風ならん
ワキ「そも〳〵当麻の曼陀羅の謂委く御語り候へ
地「抑此当麻の曼陀羅と申ハ人王四十七

代乃帝淳仁天皇の御宇かとよ横
佩乃右大臣豊成と申し人　其御
息女中将姫此山にこもり給ひて
称讃浄土経毎日読誦し給ひしが心
中に誓ひ給ふやうハ願ハくハ生身のみた
来迎あつて我に拝まれてましまさと
一心不乱に観念し給ふ　然るに其ころハ畢

命を期として此寺を出じと誓つゝ
一向に念佛三昧乃場より深く
所は山陰の松吹風も涼しくてちる
かゝる夏をも忘れ水の音も絶えず心耳
をすますよもすがら称名観念の声や
かの上品弥陀圓月の窓のうち寥々と
ある節一人の老尼の忽然と来る

たゞかりの見へつる人やらん世
尋ね給ひしに老尼答へて宣はく
誰とはおろかや愚なりよべば社来りた
まひ行られける方よ中将姫はあされ
つ我名誰と呼ると身たゞつきしり
ぬ山中経そうるよそへばあひはのぞ弘
の唱へなくてよ何ともあさましきその言へ

ちを給ひよ祭られてこそ我名もあれ嬉しさと
志ろ〳〵よ来りしと宣へハ姫君も母へハ此
願成就して守らせ給へと如来に礼拝
時節よりと感涙肝にめいじ深く経
哀の御袖もしぼるばかりよ見えにける
二〳〵や貴きお詞即みだの教へと思ふ
よつきて有難や きようひも二月

中の五日よてくだりも時なれ時節あり
法の道をおさめん為今此寺にありたるを
法華経をまよふ衆生へ守をやしなひ
御るゆそ 今ハ行そよ母へつきハ甚い
みへの化居化母乃 夢中よきんし
来りと いひもあへねハ 覚けて
花より異香薫じ音楽乃声しきりなり

まつりしや旅人よ眺やてみる山の二上
の嶽とハ二上の山とこそ人ハいへと誠
ハ此尼乃ほりし山なる故に尼上の
嶽とハ申なり若乃坂とのほりのほ
る雲乃峯であるきり紫雲に至雲であ
ありる也
かくる縁に仏けるあはれた堂
ねく寺持すてあらまんといひしあへねハ

みきやあくぬ音やんしちにかゝの
菩薩の本行らのあるうつまゝあらずわ
きけよく
唯今夢中に顕き
たるハ中将ひめの精魂なり我娑婆ニ
ありし時称讃浄土経朝夕に読とかう
ひ信心誠ありよ微妙安楽の浄界の
衆とありて共に其因縁よ花きりぞ

仏家をはらふ大喜をかうふりて法劫

味の法味をおきまり　上地「如来や盡虚空

界の荘厳は眼は雲路ようやき　レテ「説時

法輪の音聲は聴寶刹の耳にみて聖

地「蕭然とあるゝ暁の心　レテ「秋よ涼しき道よ

ひかれ〳〵法楽つらう　主「打寄せや

あくたいへんをもまはうおもと則家

うかれし心の浄土経ときてまことやく

摂取不捨　レテ「為一切世間説此難信

地「是法是為甚難　主「実も此法をきけは

さしまれて　地「信ずる事も難かるへし

とや　レテ「いはゞ頼め　地「頼めや頼めのみ名

レテ「慈悲加祐　地「令心不乱　レテ「みな人よ

地「乱るなよ「十声も　地「一称そ有かゝや

後夜の鐘ハ音すくなきのひゞき
称名の時の音の見仏聞法ハ色々の法
事ごとも妙なる光明遍照十方ハ
衆生とたゝ西方よりむかへゆく仏法の舟
風わき棹ハ法の舟へさしまねく留ま
の夢の夜ハほのぼのと明けにけり

右之本者観世太夫織部
章句眞本令板行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再校
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛